

## もうひとつの与論島の歴史「鹿児島県の近現代」連続トークイベント『#昭和100』 鹿児島大学教育研究センター 藤村 一郎

2025年9月15日に天文館図書館（センテラス内）交流スペースで開催された。参加者は、階段席もふくめれば50人以上いたであろう。聞きたくて来場したと言う市民もいれば、通りがかりで、そのまま聞きいってしまったと言う方もいた。

本イベントは鹿児島県最南端の与論島から島外へ出ざるをえなかった「与論島を出た民の歴史」をテーマとした。「与論ブルー」の海の美しさから想像もできないような、苦しく悲しい経験と、だが、たくましくも深い物語が語られた。本イベントは藤村と日高氏2名による二部で構成された。

まず、藤村による「もう一つの与論島の歴史：口之津・大牟田・荒尾」は、明治末に与論島より長崎県口之津へ、その後、福岡県大牟田市や熊本県荒尾市で三井三池炭鉱に従事した人々の話である（1901年に移住者750人）。ところが、移住先では与論人への蔑視、それに差別的労働が存在した。第一次世界大戦後に彼らの怒りは暴動（珍事件）へとつながった。戦後では1960年の三池争議が困難をもたらした。争議の渦のなかで、親兄弟親戚同士で立場を異にすることになり、与論人コミュニティはズバズバに切り裂かれてしまう。切り裂かれたコミュニティを回復したのは、大牟田・荒尾地区与論会であった。

次に近現代センターの日高優介特任助教による「もう一つの与論島の歴史：2つの盤山」は、第二次世界大戦末期に与論島から「満洲国」錦州省盤山県へ開拓団（600人超）として移住した人々についての講話であった。「満洲」へ移民した与論人は様々な苦勞をあげることになった。入植のための受け入れ態勢が未整備である上に、差別的状況があり、なおかつ「満洲国」を開拓する

ことの難しさがつきまとった。敗戦の混乱の中では女性、子どもや老人495人が残留し、自決・殺害などで死者56人、行方不明3人の惨事もあった。戦後1946年に引揚げたが米軍統治下にあった与論島へ戻れず、鹿児島県田代町（現錦江町）に入植（54戸）した。「満洲を忘れるな」との思いで当地を盤山とよんだ。彼らは、これまでの労苦をもともせず、山を切り拓き、お茶づくりに取り組み、全国的に認められる生産物をうみだすにいたった。

質疑応答も活発になされ、ゆったりとした知の空間としてのトークイベントとなった。なお、本イベントに関する著作は2026年3月に鹿児島の近現代ブックレット『もうひとつの与論島の歴史』として出版予定である。

